

造形活動の基礎・基本を定着する授業（1）

—小学校における色彩学習の事例を通して—

三根 和浪 國清あやか 一畝田 徹 林 俊雄

1. 問題

樋田ら（1997, 2002）が行った調査では、小学校における「好きな教科」として、図画工作科は1996年で第1位（86.5%）、2001年でも第1位（83.6%）であった。ところが、「がんばって勉強したい科目（教科）」の第1位にあがっているのは1996年（54.3%）、2001年（50.9%）ともに算数科であり、図画工作科は1996年で第6位（32.2%）、2001年で第6位（25.9%）であった。

これらの数値からは、図画工作科の授業は楽しいものの、がんばるという気持ちを持つような学習内容ではないと小学生に受け止められていることがわかる。「がんばって勉強したい教科」のうち、実技系の科目（教科）としては、体育科（1996年45.7%、2001年41.0%）や家庭科（1996年39.8%、2001年40.4%）が上位であるが、これらは、競ったりこれまで未体験であったことを体験したり生活に生かせるようになったりすることによって、自分自身の成長や変化を確かめられやすい学習内容を持つものであるように思われる。

現在の小学校図画工作科では、文化遺産として整理・系統化された学習内容を教え込むことよりも、むしろ児童の思いや感じ方を大切にし、試行錯誤を通して学習することができるようにするのが主眼である。造形遊びなどはその典型である。しかしながら、そのため、教師がどのように指導して良いのか分からず、無指導・放任になりがちであることも、一方ではしばしば問題点として指摘される。これは、児童にとってみれば、自分の好きに活動することは出来るので楽しいけれど、自分自身がどのように成長しているのかがよく分からないという実態にもつながり、そのことが上記のような数値として現れているのではないだろう

か。

これらの原因として、図画工作科において基礎・基本をどのようなものとして位置づけるかが曖昧にしか理解されていない実態を挙げることが出来る。基礎学力低下論争や授業時数の削減問題をふまえて、どの教科でも「基礎・基本」が大きく取り上げられており、それは図画工作科においても同様であるが、「基礎・基本」をどのようなものとして考えるかについては諸説があり定まらないのである。

板良敷（2002）は、図画工作科の基礎・基本は、「教科目標を実現するために育成を目指す資質や能力のこと」として、その資質や能力として、観点別学習状況評価の観点、即ち①造形への関心・意欲・態度、②発想や構想の能力、③創造的な技能、④鑑賞の能力、の4つを挙げている。

一方、基礎・基本を分ける例として、天形（2002）は、「造形的な表現活動を通して育まれる想像力や思考力を基礎、配色や描画などの表現力や技術力を基本とする。観察力や判断力は基礎、美術的な知識理解や材料体験は基本である。基礎は目に見えにくいが他の学習に応用の利く能力であり、基本は造形的な表現力を高めるための直接的な目に見える能力である。」と説明する。天形は、その上で「近年の美術教育では基礎に着目したが、多くの児童生徒の造形表現力の低下は基本の学習不足を示している。造形表現を楽しむ、生涯にわたって美術を身近なものとするには造形表現力が伴う必要があることを忘れてはならない。」と述べ、基本の学習が不足している実態についても指摘している。

このことから考えると、基礎・基本の定着を行うことが、図画工作科の学習に対して児童が充実感を感じ生涯にわたって美術を愛好し続けるために大きな鍵になるように思われる。本プロジェクトでは、これらの

基礎・基本の定着のためにはどのような授業が可能であるかについて検討することを主要な目的とする。

2. 色彩学習の基礎・基本を育成する授業の構想

造形表現は、人間が行う自己表現のうち、主要なものの一つである。自分なりにさまざまな技法を試みながら造形言語で自分の思いを他者に伝える。そしてこの造形言語を構成しているのが、色や材料、形といった造形要素である。人間は、造形表現において、これらの造形要素を駆使して意思伝達しようとする。

この造形要素は数多くの種類が存するが、本研究においては特に、造形表現を行う際に中心的に働くとと思われる、色彩・形体・材質感を主要な要素として取り上げることとした。造形要素が、人間の感覚や感情に根ざした造形表現の基本的意味性を持つということ

は、造形教育にとって重要なことである。自分の表現意図にあった色や形体や材質感などの表現の意志決定がなされるとき、適切な造形の要素を意味を持って選択しようとする誰もがする。小学校第6学年になる頃には、「こんな表現をしたい」という思いをしっかりと持ち、表現意図にあわせて、色や形や材質感を自分なりに選択し表現できるようになってほしいと考えている。そのためにも、小学校1年生の段階から造形要素に着目し、系統立てて指導していく必要があると考えた。今年度は、研究計画の第1年次として、造形要素の色彩について、第1学年から第6学年までの学習を系統化するともに研究授業を行い、その授業についての検討を行うこととした。構想したカリキュラムを表1に示す。なお、研究の第2年次は、材料について、第3年次は形について研究を進める予定である。

表1 小学校造形科における色彩学習のカリキュラム

1年	<ul style="list-style-type: none"> ①クレパスのお散歩(スクラッチ版画) <ul style="list-style-type: none"> ・色の家族(同系色)・友達(反対色・補色)を考えて色を塗る ②どろどろ絵の具(粘土絵の具) <ul style="list-style-type: none"> ・指や手、腕を動かして描く 	<ul style="list-style-type: none"> ③ドッカン花火(絵の具) <ul style="list-style-type: none"> ・筆の使い方を工夫しながら塗る ④いろはかせになろう <ul style="list-style-type: none"> ・色の性質や関係性を活かして色水をつくる ・色から受けるイメージによって色名を考える
2年	<ul style="list-style-type: none"> ①春とぼく、わたし(クレパス) <ul style="list-style-type: none"> ・立体を感じながら色の塗り方を工夫する ②まほうのふりかけ(スパッタリングをいかして) ③ブッチンぱっ(シャボン玉をいかして) <ul style="list-style-type: none"> ・表現技法のよさを活かしながら色を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ④水なんてへっちゃら(墨、絵の具) <ul style="list-style-type: none"> ・水の色、肌の色、塗り方を工夫する ⑤色はかせとうじょう <ul style="list-style-type: none"> ・色の性質や関係性を活かして色水をつくる ・ことばや詩のイメージを色水であらわす
3年	<ul style="list-style-type: none"> ①自分を見つめて(サインペン、絵の具) <ul style="list-style-type: none"> ・立体を感じながら色づくり、色の塗り方を工夫する ②砂絵の具を使って(砂絵の具、パステル) <ul style="list-style-type: none"> ・材料(砂絵の具)の活かし方を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ③光のくに(ステンドグラス) <ul style="list-style-type: none"> ・光の透過性を活かして、色の組み合わせなど考える ④雪の国(色画用紙、絵の具、クレパスなど) <ul style="list-style-type: none"> ・表現意図にあわせて画材を選ぶ
4年	<ul style="list-style-type: none"> ①不思議な木(絵の具、クレパス、パステルなど) <ul style="list-style-type: none"> ・一本の木から想像を膨らませてテーマを決定 ・テーマにあわせて画材、表現方法を選ぶ ・テーマにあわせて色づくり、塗り方を工夫する 	<ul style="list-style-type: none"> ②宇宙へとびだせ(マーブリングをいかして) <ul style="list-style-type: none"> ・表現技法のよさを活かす ・アルミ缶でつくった宇宙人を活かすための表現方法を考える
5年	<ul style="list-style-type: none"> ①光ワールド(画材、材料選択) <ul style="list-style-type: none"> ・光の透過性、反射などの性質を活かしてテーマを決定 ・テーマにあわせて、材料、表現方法を工夫 ・テーマにあわせて、色を工夫する 	<ul style="list-style-type: none"> ②学校大改造(画材、材料選択) <ul style="list-style-type: none"> ・見慣れたものの見方や視点をかえて、見立てをする ・見立てたもののテーマにあわせて、色、材料、表現方法を選び工夫する
6年	<ul style="list-style-type: none"> ①自己を見つめて(サインペン、筆ペン、パステル) <ul style="list-style-type: none"> ・自分の内面を見つめ、自画像を描く ・立体感を表現するための方法(色選び、塗り方など)を工夫する 	<ul style="list-style-type: none"> ②自分のマスクをつくろう(画材、材料選択) <ul style="list-style-type: none"> ・①の活動をうけて自分の内面を表わすマスクをつくる ・テーマにあわせて、色、材料、表現方法を選び工夫する

3. 授業の実際

表1に示されたカリキュラムのうち、本稿では特に小学校第1学年における④の事例を取り上げる。そして報告とともに、実施した授業の検討を行うものである。

小学校第1学年授業「いろはかせになろう」

指導者 國清あやか

(1) 指導目標

- 色の性質や関係性を感じ取り、それを活かして色水づくりができるようにする。
- 発見した色の性質や関係性をいかしながら、友達や自分のつくった色水を比較し、調和や対比を考えて、まとめたり、並べたりできる。
- 色から受けるイメージを感じたり、思いうかべたりして色に命名し、自分なりの色彩感覚を高めることができる。

(2) 題材について

- ① 本題材は、第1学年の子ども達が、自由に色水づくりを楽しむ体験活動を通して、思い切り色と関わり、色に対する造形感覚や認識を深めることが出来るようにした。
- ② 絵の具を使うときに、第1学年の児童はまず絵の具の混色に興味を示し、色づくりを楽しみ喜び姿が見られる。その行為は直感的に行われているといっただろう。そこで、色の持つ独特な美しさや色から受けるイメージをしっかりと感じ取り、自分なりに意味づけや価値づけをしてほしいと考え、本題材を設定した。
- ③ この題材を通して、児童が思う存分色に関わり、感覚的に受け止められるような体験活動を通して、意味づけ、価値づけを行い、色彩感覚を高めるような授業展開が必要だと考えた。

本題材では、色自体を楽しみ味わうために、色水づくりを体験させる。その体験を通して、同じ色でも水や絵の具の量によって、濃淡ができることや、混色による色の変化や色の持つ美しさを味わい、色と色の関係性を発見させ、自分の色水づくりに活かせるようにする。そして、その色からどんなイメージを受けるのかを考え、自分でつくった色水に命名する。そのとき、自分の知っている対象、色から受ける気持ちや感情を思いうかべるようにさせ、自分なりの意味づけや価値付けをさせる。子どもは自分のつくった何色かの色水や友達のつくった色水を自然と比較したり、隣同士に並べたりして、楽しむ活動を発展させる。そこでどのようなまとめ方、並べ方をしたいか子どもに考えさせる場を設定する。自分でつくった色水と友達のつくった色水を比較し、調

和や対比を考えて、同系色でまとめたり、グラデーションで並べたりする活動を通して、色の性質や関係性の認識を深めさせたい。また、題材のまとめの段階では、自分なりにつくりたい色の色水づくりを行い、色から受けるイメージが、友達と似ていたり、全く違っていたりすることを発見させ、自分なりの色彩感覚を感じ取らせるようにする。

(3) 授業構成

第1次 偶然できた色水に名前をつける(全2時間)

指導目標

- 色の性質を体験を通して感じ取ることができる。
 - ・ 絵の具や水の量の違いによって、濃淡ができることを発見する。
 - ・ 混色する色の種類や絵の具、水の量によって多様な色ができることを発見する。
- 色から受けるイメージを感じたり、思いうかべたりできる。
 - ・ 自分のつくった色水の色から、対象を思いうかべたり、受ける気持ち(感情)を考えたりして、自分なりにその色に名前をつける。
 - ・ 友達のつけた名前と比較して、色から受けるイメージが似ていたり、あるいは違っていたりすることを発見する。

授業の実際

- ① 3原色(赤、青、黄色)を単色で使って色水づくりをし、できた色水に命名する。

ア、教師が赤でつくった色水に命名する

- ・ 目で見て・・リンゴ、さくらんぼ、炎、ほっぺた
- ・ 心で感じて・・暖かい感じ、うれしい色、優しい色、おこりんぼうの色

イ、色水づくりをする

子ども達は、水の変化を楽しみながら、絵の具の量を増やしたり、水の量を増やしたりして、自分なりに満足いくまで、試行錯誤していた。またペットボトルを踊るようにして振りながら、からだ全体で色水づくりを楽しんでいた。光にかざして色の美しさを感じたり、ペットボトルの振り方による水の動きのおもしろさにも興味を持っていた。

ウ、できた色水に命名する

目で見た色、心で感じた色の両方を考えるように提案した。

エ、友達のつくった色水と名前を鑑賞する

- 青から生まれた色水：ゆきぞら、ゆうやけ海、海たんけん
- 赤から生まれた色水：いちごの夕やけ、大ばくはつ、もみじ色、もえる

ほのおはあらしをよぶ
ぜ、ベビア色

- 黄から生まれた色水：天使のはね色、レモンの
太よう、まぶしい光

『もえるほのおはあらしをよぶぜ』

- ・ なんか、色もえてるようで、よく考えているんだなと思いました。(Sさん)

『だらんとする色』『さわやかな色』

- ・ 同じような色なのに、Mさんは『だらんとする色』、Tくんは『さわやかな色』とつけているのがおもしろいと思いました。(Y君)



写真1 色水づくり

- ② 3原色を使ってつくった色水を混ぜ合わせ、新しい色水をつくり、できた色水に命名する。

ア、色水をまぜて、新しい色をつくりだす

混ぜる色水の量を考えたり、水を増やしたり、更に絵の具を増やしたりして、試行錯誤しながら納得のいく色水づくりをしていた。

イ、新たにできた色水に命名する

ウ、友達のつくった色水と名前を鑑賞する

『ゆうれいいろ』

- ・ なんだかゆうれいが、できそうで、そのいろはうすいし、すけているようでした。

『じごくいろ』

- ・ すごくこくて、すごくくろかった。すごくじごくというかんじのいろだった。

『なつのはっぱいろ』

- ・ なつの元気のあるはっぱのいろにぴったり。

『しょんぼりしたいろ』

- ・ なんだか元気がなくて、しょんぼりしたかんじがするいろ。

『おとうさんのいろ』

- ・ Sさんのおとうさんのかんじがするいろ。

- ②命名することを通して

- ・ 命名するのは、自分で決めて、自分で考えられるから、おもしろかったです。(友だちは)自分より命名が上手で、しかも、みんながうということがわかりました。(Mくん)
- ・ 命名するのは、目と心をつかってつけるのでとてもおもしろかったです。(Oくん)
- ・ 目で見たいいろと、心でみたいいろの見方があって、おもしろかったです。(Hさん)

第2次 色水を並べて作品をつくる(全3時間)

指導目標

- 色水を同系色でまとめたり、グラデーションで並べたりする体験を通して、色の調和や対比を感じ取ることができる。
- これまでの活動を振り返って、発見したこと、感じたことなどをまとめる。

授業の実際

- ① 色水の入ったペットボトルを並べて、学級のシンボルである「巨大でんきちくん(かたつむり)」をつくる。

ア、ペットボトルの並べ方を考える

- ・ 似ている色を集めて色の家族をつくる
- ・ 色の家族の中で、薄い色から濃い色へと順番に並べる
- ・ ペットボトルを倒して色水がよく見えるようにする

イ、200本以上あるペットボトルを並べる

- ・ 並べていくうちに色がつながっていくことを発見する。子ども達から「あれ、なんか、1本の環につながったよ。」という気づきが出された。

- ② ペットボトルの環をでんきちくんの貝殻に見立て、模様を描いて仕上げる。

☆第1次の活動を通して、子ども達が発見したこと

《いろはかせ研究レポートより》

- ①色水づくりを通して

- ・ 水が少なかったり、えのぐが多かったらこくなって、水が多かったりえのぐが少なかったらうすくなった。ほんとうにおもしろかったし、ふしぎでした。(Mさん)

- ・ まず、えのぐをいれるとき、このぐらいいかなーと考えていれて、よしこれでかんせい、あーよかったと思いました。(Oくん)

- ・ (ペットボトルを)ふりふりするのがたのしかかったです。なぜかといえば、ふりふりすると、こころがはずむからです。(Kさん)

☆第2次の活動を通して、子ども達が発見したこと

《いろはかせ研究レポートより》

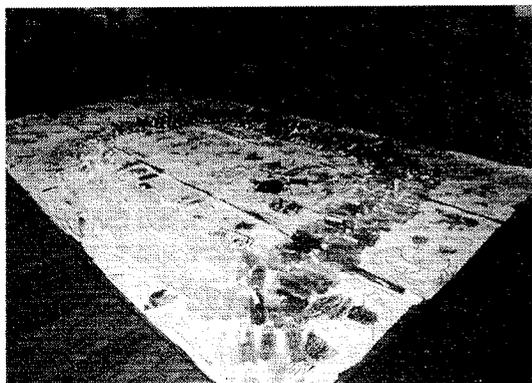


写真2 子どもたちのつくった色水

- ・ まず、きいろ→みどり→あお→むらさき→あか→オレンジとまあるいかたちになっていました。それは色の家ぞくでならべてありました。(Mさん)
- ・ こいくなったり、うすくなったりして、色がどんどんつながっていった。(Nさん)
- ・ でんきちくんのからを丸くして、できあがってみたら、にじのようにきれいでした。(Nくん)

第3次 絵の具や水の量を考えながら色水をつくる 指導目標

- 発見した色の性質や関係性を活かし、絵の具や、水の量を考えながら、自分の気に入った色の色水づくりができる。
- 色から受けるイメージを感じ、対象を思いうかべたり、受ける気持ち(感情)を考えたりして、自分のつくった色水に、自分なりに名前をつけることができる。

授業の実際

T: 前の時間に作ったお気に入りの色水とその名前を教えてください。

C: 私の色水には、「葉っぱのにおい色」と命名しました。

T: なるほど、目で見ただけだけでなく、鼻も利かせて考えたのがおもしろいね。じゃー季節は、どんな季節なんだろう。(春・夏・秋・冬 に挙手)

T: ほかに、ありませんか。

C: これはね、壁とからだ混ぜた色。心でみたら、力が付く感じだから。

C: なんか、筋肉の色みたい。

C: ジャー、百万馬力色にしたら。

T: もう一人聞いてみようかな。

C: この色水の、目で見ただけ命名は、アオビス。心でみた命名は、笑い涙のいろです。

T: 笑い涙の色って、ぎゃははと、大笑いしすぎて、出た涙ってこと?うれしくて、うれしくて涙が出る感じ?

C: それはね、うれし涙のことです。

T: では、今日は世界で一つだけの自分だけの色を作って、命名してください。それでは、色水づくりスタート。

(観察した様子) 子ども達は、ペットボトルに絵の具を入れたり、水を加えたりするとき、真剣そのものであった。混ぜ始めると、目をきらきらさせて、どんな色になるか楽しんでいる。絵の具や水の量を吟味し、気に入らないとどうすればいいか、試行錯誤を繰り返している。

(観察した様子) また、ペットボトルを振りながら、友達の色水にも興味津々であった。自分の色水を差しだして、「これも、混ぜてみたら。」とか、「もっと、赤を混ぜてみたら。」と混色を勧めたり、「わーその色〇〇みたい。」と、自分の感じたことを伝えたりして、班の友達や隣同士で自然と交流しあい、鑑賞できていた。

T: それでは、色水づくりは、ここまで。これから、友達の色水を見て回って、自分とは違う素敵な色水、命名を発見してください。



写真3 友達の作った色水と命名のよさを発見する

(観察) 子ども達は、まず目で気に入った色水を見つけると、命名に関心を寄せている。また、自分のつくった色水と似通った色の命名にも、関心がある。あるいは、どうやってつくったんだろうというような、色水の命名を驚きの表情で発見したりしていた。

T: 友達の色水の紹介をしてください。

C：Hくんの、ポカポカハート色が暖かそうな感じ。
 C：Kさんの、いちごミルク色が、おいしそうだった。
 C：Nさんも、いちごミルク色をつくってるんだけど、Kさんと少し違うね。
 C：Aくんの、天の色と光の色。
 T：私は、光の色って言ったらすぐ黄色って思うけど、確かにさわやかな光の色は、Aくんの色水みたいな色かもしれないね。
 C：N君の気持ちいい色。
 C：Kさんのふわーんとした色。
 T：どんなときにふわーんとする？
 C：空飛んでるとき。
 C：布団の中にいるとき。
 C：ブランコに乗っているとき。
 T：最後にもう一人聞いてみようかな。
 C：Mさんのゆめの色。何だかゆめの世界みたいで不思議な色だから。
 T：今日は、もう時間がないので、次は研究レポートを書きながら、見て回ろうね。

(4) 授業の検討

1 子どものリアルを大切にしたい授業

授業は大きく分けて、①ペットボトルの中に絵の具を数色入れて混ぜ合わせ、「せかいに一つじぶんだけの」新しい色をつくる、②混色してできあがった新しい色水に対して「○○色」という命名を行う、という二つの活動で構成されていた。この授業を価値づける最も大きなキーワードは、「子どものリアル」の尊重にあった。さらに言えば、これが基礎・基本を定着させる最大の仕掛けでもあった。

では子どものリアル、つまり現実とは何か。本授業において大切にされたリアルとは、子どもが自分自身のこれまでの生育のなかで体験してきたことをふまえて、一人ひとり違った感じ方をする、そのありのままの感じ方そのものを指すものと捉えるべきである。次に、前述した二つの活動でどのようにそれが保障されたかを検討する。

① 色の性質や関係性を体験活動の中から感じ取る～「せかいに一つじぶんだけの」新しい色をつくる活動

小学校低学年の頃の児童は、画用紙に彩色するとき、必要以上に色を多くつくって遊ぶ。混色することが楽しくなって、何をどのくらい塗るかということより色づくりに没頭してしまっているようである。このような状況を大人が観察すると、ついつい「もったいない」と考えてしまいがちだが、子ども達は、どの位の大きさのどんなものを塗るかということより、色自体の美

しさを感じ取っていると考えるべきであろう。何かをこの程度塗ろうという目的を達成するために、パレットの小さなスペースに絵の具を出し、混色しているのではなく、ペットボトルの水の中に、色を足しながら、自分の気に入った色を吟味している。水の量、絵の具の量、混色する色の関係などを考えながら色水をつくり、微妙に変化する色水に歓声を上げ、もっと違った色もつくりたいと活動するのである。本題材で示した指導目標の「色の性質や関係性を体験活動の中から感じ取ること」は達成できていたと考える。これから更に学習を重ねることで、色彩に関する知識を理解するというだけではなく、色彩に対する自分なりの感じ方を伴った生きた知識、即ち、色彩に対する本質的な基礎・基本を子どもたちに定着させることにつながるだろう。

② 自分がつくった色に命名する活動

つくった色水に「目で見える」「心で見える」という二つの視点で命名するという活動は、色から受けるイメージの広がりにより、有効な手立てとなったと考えられる。子どもたちはまず、試行錯誤して作り上げた色水に、一人ひとりの体験をふまえて想像力を働かせ、命名した。実験や、あるいは本やテレビなど情報メディアから受ける疑似体験、仮想体験から想像して、自分なりに最も色のイメージに近い命名をしたのである。美しく叙情的な色名がいくつも誕生した。子どもたちの想像力の前では、全世界共通の色名が無味乾燥で味のないものに感じられる。これは、まさに子どもがこれまで体験してきたことをふまえた、実にリアルな命名がされていたからであり、他の人がある人と同じような命名を思いつくことは容易ではないだろう。例えば、大人から見ると濁った汚い色と感じる色水に、



写真4 命名の様子「どんな名前にしようか？」

汚れた色だから嫌いとか片づけるのではなく、「怒られた気持ち色」、「けんかした色」「真っ暗な夜」などと

命名していた。ありとあらゆる色を子どもの感性で受け入れ、イメージを広げていることがよくわかる。

これまで行われてきた色彩学習における、ある意味常識的でわかりやすい教育内容とは、目で知覚できた色を、文化遺産として大人の世界に共通理解され、約束事として使われている色の名前を使って表現できるようにする活動であった。この授業の中で使われた表現で言うと、客観的な青、赤、緑・・・などの色名がこれにあたる。

ところが、本授業においては、子ども一人ひとりが個別の体験をふまえて色名を命名するように授業を構成した。「目で見る」場合も「心で見る」場合も、子どもから引き出された表現は、子どもを大人の世界の論理に近づけるといふより、むしろ子どもの今現在の見方、感じ方、つまり「子どものリアル」を原点とし、子ども自身の感じ方が尺度、あるいは原器となって命名されたものである。

さらに、それを互いに交流することで、同じような色合いの色水をつくっているのにも関わらず、全く違う命名になっていたことに驚いたり、色水にぴったりの命名に感心したりする姿が観察できた。友達と共感しあうことによって、一人だけの感じ方だけで終わるのではなく、一人の感じ方が、集団の中で共感的に共有されていた。

もちろん、これで色彩学習が完結するわけではない。誰もが共通理解できるような色名を理解することができるようになることともに、それを使えるようになることは造形学習の「基本」として大切である。しかしながらこの授業において保障されたように、児童が自分自身のリアルな体験をふまえ、まさに実感を伴いながら色に関わることが出来ることで、色に対する認識を深めることができるだろう。そしてそれは、ただ単に知識として色名を学習することとは違って、自分に密接につながった色として認識されることになり、自分の思いで色を選べるようになるための、大切な第一歩となるだろう。それは造形学習の重要な「基礎」である。

2 5W1H発問との関わり

鑑賞学習を進めるうえで効果的な方法について、三根(1998)は5W1H発問という視点で整理した。本授業では、この5W1H発問が効果的に使われていたことが観察された。特に、「How=どんな感じ?どんなふうにな?」という、作品全体や部分に関する感じ方を問う発問、そして「Why=どうして?」という、それらの感じ方と、主題や造形要素(形、色、材質感等々)との関連などを問う発問が、授業者によって多用されていた。これらの発問は、児童自身が命名した色名

と、その背後にある思いや感じ方との関連づけがなされることにつながっていた。

例えば、第3次では、授業者が「友達のつくった色でいいなと思った色を言って下さい」と指示し、それに対する児童の反応を受け取りつつ、「どんなとき、ふわんとする?」とか、「どんな夢なんじゃろう?」などの発問にあたる言葉がけをしていた。授業者は、色に対してさまざまな工夫を行った子どもとの言葉のやり取りを通して、さまざまな思いや想像を引き出すことができていたことが分かっただろう。さらに言えば、その思いや想像といった心の中の感じ方などを、語と関連づけし、子どもの気付きをさらに価値付けているとも言える。授業において、単に「見る」活動を放任しているだけではとどろくことが困難な世界に子どもが到達していることが分かる。

5. 結果をふまえた発展授業の提案

本授業を実践した結果得られた成果と課題を受けて、第2学年では次のような授業を構想し計画している。この実践の報告と検討結果は、次年度の本誌に報告する予定である。

小学校第2学年 授業の実践「色はかせとうじょう」

(1) 指導目標

- ことばや詩のイメージを色であらわすことができる。
- 色の性質や関係性の理解を深め、それを活かして色水づくりができるようにする。
- ことばや詩のイメージからつくり出した色水について、友達と交流し、イメージや色彩感覚の違いを感じ取ることができる。

(2) 題材について

- ① 子どもたちが主体的に自己表現できるようになるためには、造形要素の一つである色を、自分の思いや感じ方に合わせて、選んだり、つくり出したり、使いこなしたりできる力を育てる必要がある。しかし、そのために色の性質や法則性、関係性などを単に知識として教えるだけでは、子どもの興味は失われる。頭ではわかっていても、使いこなせないことにもなる。また、ただ子どもの感覚にまかせっぱなしにしているだけだと、色彩感覚を十分に豊かにすることは期待できない。そこで、色水づくりを楽しむ体験活動を通して、色と関わり、色について理解を深めると同時に、豊かな色彩感覚を獲得し、色に対する認識を深めることが出来るようにするために本題材を設定した。
- ② 本学級の子どもたちは、第1学年のとき、題材

「いろはかせになろう」で色水づくりを体験し、色自体を楽しみ味わっている。その活動を通して、同じ色でも水や絵の具の量により、濃淡ができることや、混色による色の変化や色の持つ美しさを味わい、色の性質や色と色の関係性に気づきはじめている。また、つくり出した色水に自分のイメージで命名する活動を行った。子どもたちは、その色から自分の知っている対象や、色から受ける気持ちや感情を思いうかべ名前をつけ、互いに交流しあった。この活動を通して、色に対する感じ方を先入観によって決めつけるのではなく、自分なりの意味づけや価値づけができるようになってきた。

このような子どもたちに、造形活動を行うとき、自分のイメージや思いにあわせて色を選択し、つくり出すことができるようになってほしいと考え、本題材を設定した。

- ③ 本題材の導入として、「いろはかせになろう」の学習で発見したこと、感じたことを振り返る。「いろはかせになろう」は、つくり出した色に自分のイメージで名前をつける活動であったが、本題材は対象(ことば・詩)からイメージを膨らませ、1年生で獲得した力を活かして色水をつくるという全く逆の活動である。この活動は、色の性質や関係性の理解と色に対する意味づけ、価値づけのできる自分なりの色彩感覚が求められる題材である。

そこで、第1次では、共通した一つのことばから、一人一人イメージを膨らませ、それを一人一人の解釈や思いで色を選択し色水をつくらせる。そのことばから、どんなイメージを膨らませたのか、なぜその色を選択したのか、絵の具や水の分量はどのくらいか、混ぜ合わせた色はどの色なのかなど、色水づくりを振り返り、色はかせ研究レポートを書かせる。それをもとに友達同士交流させ、友達の色水のよさを感じ取るとともに、イメージや色彩感覚の違いを発見させたい。

次に第2次では、詩からイメージを膨らませ色水をつくらせる。ことばの数が増えれば、思い浮かぶ情景や感情などのイメージも多様化する。同時に子どもたちは、どんな色であらわすかさらに試行錯誤するだろう。一色だけではなく色数が増え、色を並べることで表現する子どももいるだろう。その子なりのこだわりをもって、色のつくりかた、表し方を追究してほしい。色水づくりの後、一人一人のイメージ、色のつくりかた、表し方を振り返らせ、はかせレポートにまとめさせ、再度友達との交流活動を行う。友達の色水のよさを感じ、共感したり、イメージや色彩感覚の違いを発見すると同時に、自分自

身の新たな価値観を見いださせる活動にしたい。

(3) 授業構成

第1次 ことばのイメージを色水で表わす(全2時間)

指導目標

- ことばのイメージにあわせて自分なりに色を選択できる。
- 色の性質や関係性の理解を深め、それを活かしてイメージにあった色水づくりができる。
- 一つの共通のことばから、いろいろなイメージが広がり、表わす色も違ってくるとを発見させる。

授業展開

- ① 昨年の「色はかせ研究レポート」をもとに色水づくりを振り返る
- ② ことばを色水で表わす
ア、ことばからうけるイメージや思い浮かべるものを連想し交流する。
イ、友達との交流をもとに、色水をつくる。
- ③ 色はかせ研究レポートを書く
ア、ことばより連想したもの、思い浮かべたものを記入する。
イ、色水づくりのレシピを書く
例：○色+△色→(命名)色
- ④ 色水の鑑賞会
ア、友達と自分の表現の違いに気づき発表する。
- ⑤ 色はかせ研究レポートを書く
ア、鑑賞会を通して発見したことを記入する

第2次 詩の世界を色水であらわす(全7時間)

指導目標

- 詩のイメージに合わせて自分なりに色を選択できる。
- 色の性質や関係性の理解を深め、それを活かして詩のイメージにあった色水づくりができる。
- 多様な詩のイメージからつくり出した色水について、友達と交流し、表し方のよさを感じ取るとともに、イメージや色彩感覚の違いを発見することができる。

授業展開

- ① 詩のイメージを色水で表わす
ア、好きな詩を選びそのイメージにあった色水をつくる。そのとき、何色かの色水を並べたり重ねたりして表現する。
- ② 色はかせ研究レポートを書く
ア、選んだ詩から思いうかべるもの、様子、気持ちなどを記入する。
イ、色水づくりのレシピを書く。
例：○色+△色→(命名)色
ウ、色水の組み合わせ・並べ方などの理由を書く。

③ 色水の発表鑑賞会

- ア、詩のイメージと色水を発表し交流しあう。
- イ、友達と自分の表現の違いに気づき発表する。

④ 色はかせ研究レポートを書く

- ア、発表鑑賞会を通して発見したことを記入する。

⑤ 色水のレシピをもとに、色カードを作る

5. 成果と課題

本研究では、基礎・基本を定着することを目的とした授業を開発し、その検討を行った。今年度開発した、色彩の基礎・基本を定着する授業では、児童が見せた行動や発言に、期待されるさまざまな様相が観察できた。これらのことから、子どものリアルを大切にしていた授業が基礎・基本の定着のために大きな効果を持つことが示唆された。授業で得られた結果をもとにして、基礎・基本をさらに定着するための授業がどうあるべきかについて、検討しなければならない。さらに、基礎・基本が本当に定着したかどうかについては、継続した検証作業が必要である。今年度の授業対象であった第1学年児童が第2学年に進級してからの授業検証

を行ない、その方法や効果を検討することとともに、形や材質感といった造形要素の基礎・基本の定着にはどのような授業が効果的であるかを探ることを今後の課題としたい。

【参考・引用文献】

- 天形健「基礎と基本」『形Forme』No.271、日本文教出版、2002年
- 板良敷敏編著『小学校図画工作科 基礎・基本と学習指導の実際—計画・実践・評価のポイント—』東洋館出版社、2002年
- 三根和浪「小学校美術鑑賞と5W1H発問」『学校教育実践学研究』第四巻、広島大学学校教育学部附属教育実践総合センター、1998年
- 樋田大二郎「小学生の学習行動」『研究所報 vol.10 第2回学習基本調査報告書—小学生版—』ベネッセコーポレーション、1997年
- 樋田大二郎「小学生の学習に関する意識・実態」『研究所報 vol.27 第3回学習基本調査報告書・小学生版』ベネッセコーポレーション、2002年